

バルト3国を旅して

為我井輝忠

あまり知られていないバルト3国を紹介したい。「バルト3国」とはエストニア、ラトヴィア、そしてリトアニアを合わせた、バルト海に面し、かつてソ連の支配を受けていた国々のことである。

この夏これらのバルト3国を初めて訪ねて、各地を歩いてみた。実は、この3国について深い知識があった訳ではない。しかも、今回はイギリスを訪ねることがメインであったので、その帰路に少し訪ねてみたいといった程度であった。しかし、いざ訪れてみると、各国とも小国ながら独自の文化や歴史を有し、それらを知ることによって逆に少しずつ一層興味深い旅行となっていた。

7月1日、イギリスからコペンハーゲン経由でエストニアの首都タリンに向かった。中世の面影を残す港町であるが、教会を始めとして、旧市街地、市庁舎、博物館等見るべきものがたくさんある。特筆すべきこととして、ここでは5年に1度の「歌の祭典」という大きなフェスティバルがあり、図らずも参加することが出来たことである。

この祭典はソ連の支配を受けていた時代も行われ

ていて、独立への機運を促したエストニア民族の誇りを表すもので、1万人を超す参加者と歌を聴く10万人以上もの人々が共に歌い上げる素晴らしい祭典であった。

この国では、タリン以外にナルヴァ、タルトゥ、ハープサル、パルヌを訪ねた。国内旅行は列車があまり発達しておらず、専らバスでの移動になったが、特に、興味を覚えたのはナルヴァで、ロシアと接する国境の町である。真近にロシアを見ることが出来た。川を隔てて数百メートル先にはロシアの大地が広がり、歩いて行くことが出来そうなほどの近さであった。

ラトヴィアでは首都リガを中心に、バウスカ、リエパーヤ、ダウガピルスを回ったが、この国で一番興味を覚えたことは第二次世界大戦前後のユダヤ人の存在であった。

この国にはかなりのユダヤ人が住んでいたが、ドイツ軍の侵攻で彼らは強制収容所へ連れて行かれ、その多くは殺害された。

彼らが住んでいたゲットーやユダヤ教のシナゴグ、学校等は破壊されて今ではほとんど残っていないが、実態を知りたいと思い、「ユダヤ人街Walking Tour」というものがあったので参加してみた(しかし、参加者は私一人だったが)。

かつて第二次世界大戦前この国には何十万というユダヤ人が住んでいた。しかし、ドイツ軍の進出で彼ら



タリンで開かれた「歌の祭典」(7/3 ~ 7/6)の最終日



「歌の祭典」に参列した大統領夫妻とご子息



リガで見かけた民族音楽グループの女性たち



リガにあるユダヤ人虐殺記念碑

は収容所へ連れて行かれ、その多くは殺害された。彼らが住んでいたゲットーやシナゴーク等を訪ね、さらに新たに造られたユダヤ人記念館や宗教施設など各地で見る事が出来た。

最後に訪れたリトアニアでも、首都ヴィリニウスと旧首都であったカウナスにおいてユダヤ人関係の施設と事跡を見て回ったが、この国で特筆すべきことは、「日本のシンドラ」と言われる杉原千畝の存在である。

彼は第二次世界大戦の初期に当時リトアニアの首都が置かれていたカウナスの日本領事館で領事代理をしていたが、1940年7月大勢のユダヤ人が日本通過のヴィザを求めて領事館にやって来た。彼はどうしたらよいか苦しみ、日本政府に判断を仰いだ。政府の意向は「ヴィザを発行するな」であった。

杉原はその意向に背いて、人道的な立場から2000ものヴィザを発行し、6000人以上のユダヤ人の命を救ったと言われる。ユダヤ人たちはシベリ

ヤ大陸を経由して日本に到着し、そこからアメリカへ向かって、安住の地を得ることが出来た。

その記念館を訪ねることが出来た。かつてここで多くのユダヤ人を助けた勇気ある一日本人を偲び、感無量の思いに浸った。彼のことはこれまで様々な書籍を通して理解していたが、さらに興味が増したことは言うまでもない。リトアニアでは誰もが彼のことを知っていて、あちこちに彼の記念碑があった。私たちはこのような日本人がいたことをもっと知るべきだと思う。

こうして私の1か月に及んだバルト3国の旅行も終え、7月31日帰国した。バルト3国はあまり日本との関わりはそれほど強くないが、小さな国々ながら独自の歴史と文化を持ち、興味溢れる国々であった。私はまたいつか訪れてみたい。

為我井さんによる「バルト3国を旅して」のお話の会を開催します。詳細は24ページをご覧ください。



杉原千畝(1900～1986)



カウナスにある杉原記念館